元寛日記巻 五六

和書門
一五八二六號
一七四函
二 九架
二〇冊類

内閣文庫
和書
一五八二六號
二〇冊
一六三函
一七架
類

内閣文庫
番號 和 15826
冊數 20(3)
函號 163 186

東四十九

国立公文書館
National Archives of Japan

元寛日記巻之五

大坂勢ことごとく敗北し或ハ討死及多く櫓下に火を掛けれハ秀頼并に御母堂台所曲輪の土蔵に入り給ふ相従ふ輩ハ大野修理亮速水甲斐守荻野道喜道的毛利豊前守同長門守伊東武蔵守武田左吉中林出雲長三郎加藤弥平太堀対馬守真田大助高橋半十郎或ハ山三郎と有同十三郎或ハ庄三郎と有土肥庄五郎寺尾清右衛門

日本政府図書
書籍館印
浅草文庫
昌平坂學問所

竹早十右衛門堀承八蔵同三十郎中高平三郎
竹田永翁小室武兵衛中高将監大野信濃
守以下二十五人なり其外浅井周防守今木
源右衛門別当別所蔵人信範此人は御使に出
ければ二人は遠くに遁れ別所は立帰り向て
切腹す女中には大蔵卿の局饗庭の局
宮内の局阿古の局右京太夫局御玉上臈
など重伊豆丹後局は味方にことごとく救ひ出し
城中にも火掛りければ岡山表より遠くに

高野山に落行く彼人表情右衛門
一人相従ふ大坂落去此後切腹仕り候由
としにて孫生けるに思ひの外御免を
かうむりある由則大師年忌壱万石を下さる
嫡子右三郎も　秀忠公へ召出され
同八日天守より火に依て阿部備中守
正次井上主水正正弘木落城此勤あり
秀頼公は母公糯蔵の土蔵に隠れ重
臣は法自害ありて並びに上野母

井伊掃部頭安藤対馬守卿に依て去ル
回辺をこれかくむる時に　家康公々里
加へ孔基十簡後民部々并及豊後守刑部
法使として去ル節此節に来りて大野
修理を招出して云秀頼公并に法母堂
淀殿此法令御申られ一篇右座せらる屋
高捷く赴き給ふ屋き此旨演説し治長
去ル節に入り後殿出申て云法和睦の事
宗れおもとりに秀頼には異儀なしとい人とも

法母後法令息なし此上ハ仕かりこときなし
依し来一人の申条　家康公法らさ
かひ有る屋しうく違所の甲斐守を呼出し
に速水の申条も亦彼擢の申条も同し
依く世使海川より右此趣を云上し
然ハ二位局来る屋し御儀方へ御
いまつらる屋さらす有りとてかさ称くく
加て孔豊後に添らる間文積九鬼ゝ須
理に帰る処にて秀頼并に御儀法出

有といへとも宗重ハ恐らく候慥失候今此
治身なきハ少しく討取るにて渡らせ
給んも取りかゝりしと挨拶候之使ハいふ
片桐市正宗物一振残る一丁八　家康公
此宗物を治道ひに遣候趣しらせく出ん
二位局を妻に宗也昇いたし候去歳此内も
治道ひを待附なりける時に井伊掃部頭
安藤対馬守河内使申なる密謀して云
唯今此御なくハ秀頼定まらぬ者なり

趣し御多勢重ハ渡候次第なる趣しかさ継て
上使きたらさるいせんに攻殺しなる趣し
かくして去歳此中へ鉄炮を打かけ廊下を
打落ふとんとかつまて去歳此内にて重
二ままをかんてく火を放し一人も残らす候
自害候
同九日徳家へ討れる首数合一萬八千
八百六十四　其外軍家御旗本へ討れる
首二百九十五都合一万九千百五拾九也

同日蜂須賀阿波守至鎮か郎人長坂三郎
九郎八幡山茶屋辺にて長曽我部盛
親を生捕る郎人吉田孫九郎一説に云
臼村八郎と云者之と云り是も同しく生捕らる
六条川原にて誅せらる
同十日　家康公ハ八日に茶臼山出御
有りて御入洛　秀忠公ハ九日岡山を
出御伏見へ還御
同日　家康公京都にありて諸大名
に御對面軍忠比類もなき旨に依
褒美以下有之
同十一日秀頼妾成田五兵衛助直か娘也并子に
国松と云有り是ハ実子也憚り
京極若狭守か母儀常高院方へ遣し
置とも月頃我方に大坂一戦乃前に国松
乳母も城中に入まいらせ落城の砌り乳母
是を抱へ逃去出村木屋太郎左衛門と云
者此所に来る　彼男妻子なかりしゆへに

かの乳母を妻として国松殿を養子
とし秀頼の子と云事ハ爰にも知
られ其時にこれを見たる者有りて
板倉伊賀守へ告る則召寄せ金銀を与る
に材木屋の妻なり大坂に於て京極豊
後守の家人坂部徳助と云者此子を里
子と云ふ伊賀守かの子を呼て名ハ何と
云やとたゞ給ふに上へ様と云と言
ふ然れハ秀頼の子に紛なしとて

誅せらるゝ時に七歳なり材木屋夫婦
にハ構ひなし
同十二日此晩京古田織部正重勝父子
云人忽自害ス是ハ織部入茶道宗匠
法師也付毎日里景村其元家の預人合
田ハ大坂浪人也故に秀頼に親
自ら洛中一放火致せんとの謳歌の説
ありて自殺するかと云々
同九七日上野館林の城主榊原遠江守

康勝卒ス時に二十六歳是ハ大坂陣中
痔漏を破り血流て鎧壷にあふれ
押て軍役を勤め京都にて卒ス
妾腹に男子一人あり榊原平十郎と
号ス家臣中に預て生母て異儀有
子なき由上聞に達ス依て大須賀出
羽守忠政子千代ハ幼稚にてお国と号ス
康勝にハ甥なり是を以て家督と
ス後に松平式部大輔忠次と云しハ

是なり
六月五日大野道軒大仏北辺別当
源院に隠居りこれを告る者あり是板倉
雑色を遣ハし大勢にてこれを生捕
暑気甚しく板倉これを常々言ふ手を
縛ふしむり小手を免ス時に道軒殺云同
此侍川井平五左衛門にとり付き組合
をとれんとス川井道軒を押伏せ忽ち
小手をとられよく縛ふむり堀川町人皆御

て云桙堀の地は堂社仏閣寺院民家
繁昌の地なり道断なるに悉く火を放し
伽藍を焼き或ハ其身まて焼死するもの街
に満つ平重衡か奈良を焼く罪科の
例ふ海の色郷民に勝る罪にもいふへき
ことし甚さりに空によりて列堀を
引つて後刺罪候
同十六日武家古法の書を以て
家康公より　秀忠公へ奉せらる

同廿一日　秀忠公御参内
七月十七日　秀忠公二條御城に而御
あり　家康公御対面
同日本多甲斐守政勝伯父出雲守忠朝
の遺跡上総の国大多喜五万石給ハ
同十九日　秀忠公伏見に出御有
江戸へ赴しめ給ふ其日ハ膳所に御
止宿　廿日ハ永原　廿一日佐和山
廿二日柏原　廿三日岐阜町叓に一日

御邉笛鶴を遊ハせ御上覧有りける耳
その荻河原に於て御旗本の士内藤
甚八と云市川傳之助と喧嘩を仕出し
甚八を折ゑ致し立除くといへとも
三の場に於て深手を負ひ殊に川を
越へける故にや是にも同しく死し相果
翌之日死骸を見おはん然きとも為人
少ともに死する故に哀をしく候
十五日名護屋御止宿　十六日岡崎

十七日吉田　十八日濱松
十九日掛川　此日田中に付時途中に
おゐて御旗本の士長坂茶利惜然
出して御駕籠前に参踞候
秀忠公怪しく思し召され子細を
御尋ある長坂謹んて今般上総介
忠輝卿御上洛の砌り守山の驛に於
て故なく士を誅せられしと云々
秀忠公還御の後御糺明ある處き旨

仰らるゝ条利大きに恐悦候
八月朔日府中　二日蒲原
三日三嶋　四日小田原
五日藤沢　六日江戸へ着御
家康公には八月四日京都御発駕
五日水口　六日亀山　七日桑名
八日名古屋　九日十日御逗留
十一日岡崎　十二日吉田　十三日濱松
十四日掛川　十五日田中

十六日駿河府中城へ御帰城なり
秀忠公も十七日忠輝は老臣共を
召出され長坂を誅せらるゝ子細は佐殺
有りし中分為分明ならず候信臣ともたもひ
云上に及さるの事又は御旗本の士なきハ
たゝ彼き当惑して陣訪の詞なし意
外侍なる誅せらるゝと云々　仰にいはく
死人に口なし其上旗本の侍を理ふ
盡に誅し剰へ云上を経候是大者挂

事也迯て法沙汰あるべきとの旨上意有
御きげん悪し是故に忠輝ハ御勘気中
大将勤忠輝は此家人安西右馬允
平井三郎兵衛両人彼者を糺し
者なれハ彼両人を茶利方へ解死人
に出しそくて罪をあがなハんと條々
平井ことさわて忠を存じ称せハ誠
に志道を成敗るりとて遂電ハ
安西ハ京に而その後安西ハ月あを

秀忠公忠輝は法り跡ありく並に
家臣花井主水大者後家事大坂
法係に臨次御抱也憐急他事一ゝ
こまとも蔵り剣花井と安西とも法乗
に召出され対決を遂させられまる
雖仰ら沙遍寒云ハ
是とも云も安西自他の甚別るまきに付
付錯ゆに及ぶとく云く
同十二日尾張権中将義直は浅野左京

大夫幸長女を嫁せらるく
同十七日　家康公花井主水を駿
府に召し今度忠輝ハ何故に軍役
懈怠し軍忠なきやと仰たまへは称存
主水御答に云く先手ハ軍令とも
道明寺表に於て敵と刃を交へ候
使を馳せ手勢を召るといへとも先手
ハ大将伊達正宗郡山にさしへ拒絶せ
しむる何のこと敵陣をやぶりかたき故に
滞留せしむる其間に落城也ゆへ手をむな
しくせらるくと云々日来志し所望を
召出さるく仰ある処に主水口上乃
如し正宗ハ忠輝か其舅なりいの旨
所存ありて遅滞し忠輝白をおさへ
留るやと諸人不審ス
同廿四日　秀忠公より上使として
酒井備後守忠利を差ハさる駿府に
於て御きけんを窺ハせらるく其次に

仰上られて云く去年人質にいたし
置し大野修理亮か二男弥十郎をハ
誅戮仕る處に出仕をせらる
家康公深きうらみ御憤怒あり使者
に十五歳死骸を下する返事趣ハ
さらし忠利給る
同月五日武功下へ合浄禅寺に於て
大野弥十郎誅せらる
同月六日今度大坂表に於て毒張申

高名仕者をも加く御吟味之加増を
下さる

元寛日記巻之五終

元寛日記巻之六

御加増乃面々

大番頭　高木主水正組

五百石　渡辺六左衛門

三百石　金田惣八郎

三百石　兼松源五左衛門

三百石　高木忠右衛門

高木茂右衛門儀ハ三百石並ニ被仰付候ゆへ
此ミも似のある故此度ハ加増なし

御書院中嶋以書伯耆守組

千石 大久保四郎左衛門
千石 中根傳七郎
千石 高木善次郎
千石 今村傳四郎
千石 松平隼人
千石 土方宇右衛門
五百石 安藤傳十郎
五百石 大久保半之助

五百石 大久保源之丞
五百石 井戸左馬之助
三百石 鈴木宗次太郎

溝口半左衛門城織部組ニ而五人ハ千石並也
御仕置くとも親御勤候者出家り法改易
故々所加増無し

御書院番頭水野隼人正組

千石 水野多宮
千石 東野宗右衛門

千石　横田孫三郎
千石　赤見猪右衛門
千石　天野佐左衛門
五百石　川口茂右衛門
五百石　花房右馬之助
五百石　三木十左衛門
三百石　本郷庄右衛門
三百石　堀田勘右衛門（左）
三百石　内藤左源太

御書院番頭松平越中守組
千石　岡田彦五郎
三百石　跡部民部
三百石　駒井右京
右組外
六百石　御使番　中山勘解由
五百石　同断　山田十太夫
五百石　御膳番小性兼　田中与左衛門
五百石　同断　川口長三郎

四百石　御手前番小性衆　安藤喜助
三百石　同断　土肥半三郎
三百石　同断　八木勘十郎
四百石　御小性　稲垣藤七郎
五百石　御小性組井上主計頭組　大屋右門
三　同板倉周防守組
四百石　高坂平六郎
同成瀬豊後守組

三百石　大番土岐山城守組　安藤与八郎
三百石　石谷十蔵
三百石　御納戸衆　小栗又六
四百石　寄合組内　中山助六郎
三百石　同断　荒川孫九郎
都合四千五人御加増并二人高路有之
以上とも頂加増有之し
内藤帯刀自分高名仕里部屋住之内

新恩二萬石賜ル
榊原左衛門　前田十三郎
右両人ハ高名自分ニきまりといへとも
能場所にさゝへ大勢高名之證拠に
立申
本多右掃部
久世三四郎　此者共切て覚之
右三人ハしのんて浅先よく手のうちに
合申候

森川内膳　大久保助左衛門
林三十郎　大久保半助
稲葉勘右衛門　朝比奈源太郎
河理権右衛門
右七人ハ浅勘気之者共故浅先よく
手のうちに合申候
御目付　豊嶋刑部
同　加々爪民部　此時ハ甚十郎といふ
御使番　間宮権左衛門　後ニ隠居　石川森右衛門

御軍法も背き前田筑前守利常ハ先手に討
手に合申候故治部も氣色も悪敷
右四人ハ　家康公御直人いはきも
先手に旗ミく手に合申候
阿部九馬之助　御前引取
是ハ御旗本味方崩れして敵軍付かけしき
組の面々連能場所にて〆へ将軍家治世に
御覧抱ハさりきとも後味方敵軍を敗軍せ
ず候と治兵衛有る時上意にハ九馬助に對し
同じ如申事や思や存居しと仰にあて
攀の證據に立ツ
去ル五月七日大御合戦に治先
手に旗ミく付死之面
高木主水正組
大嶋忠四郎　米倉小傳次
筒井甚之助　林　藤四郎
同宮左五郎
水野隼人正組

松平庄九郎　篠田平七郎
篠田平十郎　山口小平太
松平助十郎　山崎助四郎
右之組合之討死十七人也
安藤彦四郎　坂部作十郎
安藤治右衛門
是ハ御使番深手を負小屋に帰りて死也
山口伊豆守
御勘気を蒙り在京故井伊掃部頭手に

加ハり五月六日に討死也
本多出雲守 七日討死　小笠原兵部大輔 七日討死
小笠原信濃守 七日討死　古田左近
奥田三郎右衛門 六日討死
神保長三郎 討死 但し味方討是ハ六日大和口にて
車田平七同子息 七日討死
筒井主殿頭 郡山城被攻落之自殺也
大鳥九大夫 七日討死　松倉豊人 七日討死
古田織部父子六人

是ハ素人ニ而茶屋京都出付而株果是皆に
よりて後難を恐れて自害候

首實検之目録

無之事多故にこゝを異候但し大坂大将分ニ
首取者計りこゝをも記候

真田左衛門佐首ハ
越前宰相忠直卿之士西尾仁左衛門討之

御宿越前首ハ　右同家　野本右近討之

木村長門守首ハ　井伊掃部頭内　安藤長三郎討之

内藤新十郎首ハ　同所　日下部源太郎討之

山口左馬助首ハ　同所　八田金十郎討之

塙團右衛門首ハ
浅野但馬守内多胡助左衛門矢を放川て
射おとし候八木新左衛門はしり寄りて首取
候と云々

淡輪六郎兵衛首ハ　亀田六左衛門討之
三郎兵衛共に浅野但馬守内亀田か家人ニ八六左衛門組り
いつく抱して云換ゆる事有れと此記録故まゝ爰に記之

後藤又兵衛ハ
政宗此手より打出る鉄炮にあたる深手負たるハ吉村
武右衛門に申付首をかゝせ深田に是をかくしおき後掘し
出して獄門に掛る
薄田隼人正首ハ水野日向守内川村新八郎討取
佐久間蔵人首ハ井伊掃部頭内仁木舎人討取
牟礼孫兵衛首ハ右同家日下部三郎右衛門
大久保喜八郎討付

大野道軒ハ生捕られ堺に於て誅せらる
長宗我部宮内少輔ハ生捕られ誅せらる
以上
九月九日　家康公駿府を御発輿
江戸に到着し給ふ
十月九日神奈川に着御
秀忠公御迎として神奈川へ出させ
らる　公に御対面　翌十日　両将軍
家御発輿十五日江城に着御

廿日にハ　家康公戸田辺に出狩し
給ひ二十日除御還御
十一月廿七日　家康公出狩場より
江府に還御有り
廿八日諸大名御目見へ有り此時松平下総
守忠明を召し摂州大坂の城十万石を
賜りける次に本多甲斐守政朝を召出さ
今度汝か伯父本田出雲守忠朝討死
感し思召すところに依りて彼遺跡

上総大多喜根古屋五万石を政朝に賜る
忠朝にかはりて忠勤をはけむへき
旨仰付らるゝ又小笠原右近大夫
忠政に信州松本八万石をたまハり
水野日向守勝成に和州郡山城六万
石賜る古田大膳亮重治ハ石州濱田城
五万四千石余松倉豊後守重政にも
肥前嶋原五万石三宅越後守康信
勢州亀山城壱万石加千石或ハ加恩或ハ

訓語ありし是皆今度大坂表に於て
軍功ありし感せられて訓に依て沢村
五兵衛国境諸将に命して山城国淀の城
こまりを修覆せられて賞永元とも三ヶ旨
にて功ありし

同九月九日　両将軍家仰に曰く
自今以後三年に壱度つゝ領主皆目
付を差遣はさる所をおかれ仰出されけれ
奥羽会津くハ豊臣将ま伝永田丹後守
下向ス彼人々江戸に於て訓語ありし
条目のことく会津に於て下屋敷を
下されこれ家屋を建ち領す蒲生下野
忠郷これを経営ありし御目付流巡見へ
領中に於て地坂の善悪百姓困窮所せ
しむるや否やと密に見せしめ其の実
否をも糺明し或ハ御法目安ホモ
収納免云上せしむる事あり国々へ
これを差はさるて御目付流下加ふ比

如し
十二月朔日諸大名旗本諸士御礼あり
今日松平式部大輔忠次幼少より一族家臣ニ
を召て仰に曰忠政か伯父榊原遠江守
康勝大坂表に於て軍忠をはけまし
少きとも義戦以後ニ病死ス実子なし
然るに言上せしむるに依て大須賀出羽
守忠政か嫡子を以て榊原の家を相
続せしむ忠次ハ康勝か姪の子なり

故に賜ると云々
同四日　家康公江戸御城御首途
有て駿州に赴き給ふ
同十六日駿河へ御帰城有りこの年
駿府に於て御越年あるへき
始の御儀也

元寛日記巻之六終

国立公文書館
National Archives of Japan